

元所員らの戦後

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学平和教育登戸研究所資料館 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 百合子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18528

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

展示 第二期：8月15日以降の登戸研究所 元所員らの戦後

塚本百合子

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

戦前の登戸研究所の活動については、登戸研究所関係者・ジャーナリスト・研究者らの論文・書籍、そして当館が2010（平成22）年に開館したことによって解明が進んでいる。しかし、戦後の登戸研究所関係者の活動については先行研究が少ない。そのため、第6回企画展第二期の準備段階等で新たに収集した証言・資料を基に、以下3点について解明することを本稿の目的とする。

第一に挙げるのは、GPSO（Government Printing Supplies Office＝政府印刷補給所）の活動である。この活動については今まで関係者から詳細に語られたことはなく、残っている記録は、伴繁雄（登戸研究所第二科第一班長）が『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年）を出版するにあたり用意した手記⁽¹⁾のみだった。本稿では、新規に他のGPSO関係者からも証言を集め、国土地理院が収蔵している横須賀上空の航空写真と併せて考えることで、GPSOの実態を解明することを試みる。

第二には、登戸研究所関係者の公職追放である。GPSOで勤務する元登戸研究所関係者がいる一方で、公職追放によって職を制限される関係者もいた。本稿では、1950年代に地元の村会議員に立候補した大月陸雄（登戸研究所庶務科）が残した関連資料を元に、登戸研究所関係者の公職追放について解明する。

第三に、登戸研究所関係者の交流によって、戦後何十年も語られることがなかった登戸研究所の活動が公になっていく過程を解明する。

1. GPSO（政府印刷補給所）と元登戸研究所関係者

(1) GPSOの発足

アジア・太平洋戦争後、ソビエト連邦（以下、ソ連）とアメリカ合衆国（以下、米国）の対立が深まり、1950（昭和25）年6月に朝鮮戦争が勃発する。その直前である1950年の春ごろ、元

第三科所員ら数名に、第三科長であった山本憲蔵（終戦時陸軍主計大佐）より突然連絡が入ったという。山本は高給を保証するだけで伝え、勤務先・仕事内容について具体的に触れることなく彼らに面接を求めた⁽²⁾。

山本は、GHQに召喚され取り調べを受けた後、1950年頃、米海軍横須賀基地内にあったFRU（野戦研究班）の下部機関であるGPSO（Government Printing Supplies Office = 政府印刷補給所）のチーフに抜擢される⁽³⁾。GPSOとは、米国が対共産圏、朝鮮戦争下で〈秘密戦〉を遂行するにあたり、必要な資材を供給するために設立したと考えられる組織である。

米国が山本をチーフに抜擢したのは、偽造券製造と流通に関する十分なノウハウを蓄積しており、かつ対ソ連情報戦の経験もあったためである⁽⁴⁾。要請を受けた山本は、元第三科所員10名ほどを集め⁽⁵⁾、初期GPSOを発足させる。初期は元第三科メンバーのみで構成されていたようだ⁽⁶⁾。

1952年、伴繁雄（終戦時陸軍技術少佐）の下に山本から連絡が入る。同年6月に山本は新拠点設置準備のためサンフランシスコに移るので、伴を横須賀でのGPSOチーフ後任にしたいという申し入れだった⁽⁷⁾。

第三科ではなく第二科だった伴に声がかかったのは、第二科では写真に関する高度な研究が行われていた点⁽⁸⁾、秘密インキを開発していた点（偽造には高度なインク知識が必要）、そして写真やインクの高度な知識・経験を持った元第二科所員を集めるには彼が適任だと考えられたためだと推測される。伴は山本の申し入れを受け、1952年4月よりGPSOのチーフとして米海軍横須賀基地に勤め始める。



第1図 GPSOのメンバーたち

個人蔵。1956～59年頃撮影。「GPSO」と書かれたフラッグを手にしている。撮影地は不明。右から2番目が山本憲蔵。

(2) GPSOの仕事内容

伴繁雄の契約期間は10年間であり、給与はドル建てで支払われた。当時は1ドル=360円だったため、一般的な日本人収入に比べ給与は高額だったと伴は手記に残している⁽⁹⁾。伴がチーフになってからは、従来の元第三科員に加え元第二科員、そして登戸研究所関係者以外からも優秀な人材が横須賀に集められ⁽¹⁰⁾、20人ほどの規模に拡大した。彼らは1961年にGPSOが横須賀から撤退し、サンフランシスコに移転するまで、2年交替でサンフランシスコと横須賀を

行き来していた⁽¹¹⁾。

横須賀では朝鮮戦争や共産圏との＜秘密戦＞のため、中国・北朝鮮・ソ連のパスポートや各種証明書の製造を行った。これらの国で使用されていた用紙は粗悪であり、印刷は凸版・オフセットで、高度な製紙技術・印刷技術を使ったものは稀だったそうだと⁽¹²⁾。また、真贋判定についての研究も元登戸研究所関係者たちによって進められ、登戸研究所で養われた技術・知識は米軍で活かされることとなった。

横須賀の工場は少量・多種品目生産の小規模なものだったと伴は手記に残している⁽¹³⁾。製造に必要な機械類手配は山本に一任されており、抄紙機（紙すき機）は登戸研究所北方班で使っていたものをベースに、国内の抄紙機メーカーに作らせていた⁽¹⁴⁾。第三科で養われた山本の偽造ノウハウに米軍が大きな信頼を寄せていたことが伺える。

その後、米国のベトナムへの介入が本格化する1961年以降、横須賀から完全移転したサンフランシスコでは、ベトナム紙幣の製造も行われた⁽¹⁵⁾。

(3) 勤務場所

基地内のどこで働いていたか、今まで具体的な場所が特定されたことはなかったため、ここでは勤務場所を特定することを試みる。

場所について述べられているのは、従来は伴手記のみであったが、2015年にGPSOで勤務していた2名から証言を得ることができ、伴手記および横須賀上空の航空写真と併せて考えることで具体的な勤務場所が見えてきた。

① 勤務場所についての証言

【横須賀について】

- ・横須賀基地内の正面ゲートから入って最も遠いトンネルをくぐった海辺にあり、人目につきにくいところだった。（「伴繁雄手記」138）
- ・正門まで専用のバスが迎えにきていた。ゴルフ場の近くだった。（細川陽一郎証言⁽¹⁶⁾）
- ・正門から入って左側、海沿いに行った旧日本海軍の建物で初めは働いた。1954年頃にトンネルをくぐった先の、突き当りを右にいった海辺を埋め立てた場所に施設を新たに建設し、ここに移転。ゴルフ練習場が近くにあった。松が浜という地名だった。（元第三科北方班・GPSOメンバーP氏証言⁽¹⁷⁾）

【サンフランシスコについて】

- ・郊外のサン・ブルーノにあり、施設はNED（Navy Engineering Division = 海軍機械部品補給処）と呼ばれた。（「伴繁雄手記」138）

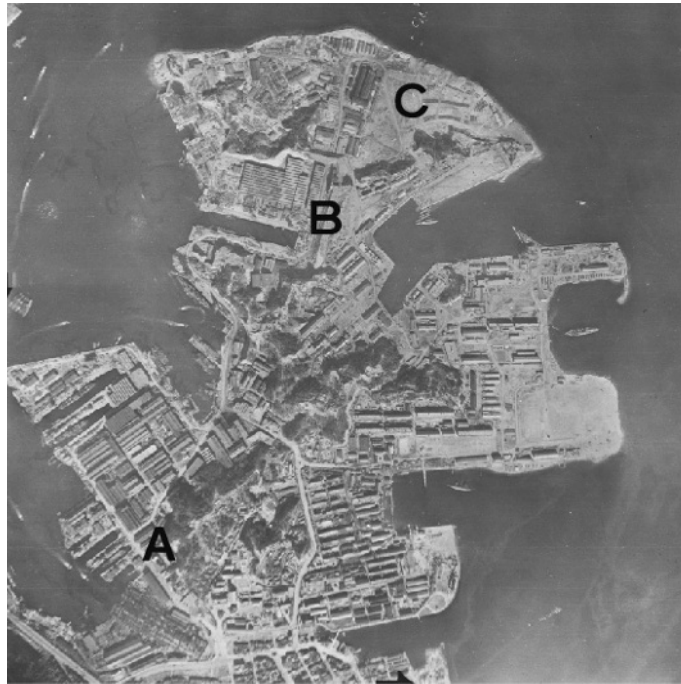
② 航空写真との照合

証言にあった場所を航空写真で検証してみる。年代の異なる下記4点の航空写真において以下A～Cに注目していく。

A 初期GPSOがあった場所

B 「伴手記」およびP氏の証言にあるトンネル

C Aから移転後の施設があったと推定される場所。海岸沿いの地名が1958年「横須賀市街図」によると「松が浜」と明記されている点⁽¹⁸⁾, 伴手記およびP氏の「トンネルをくぐった」という証言にも合致する点からそのように推定する。

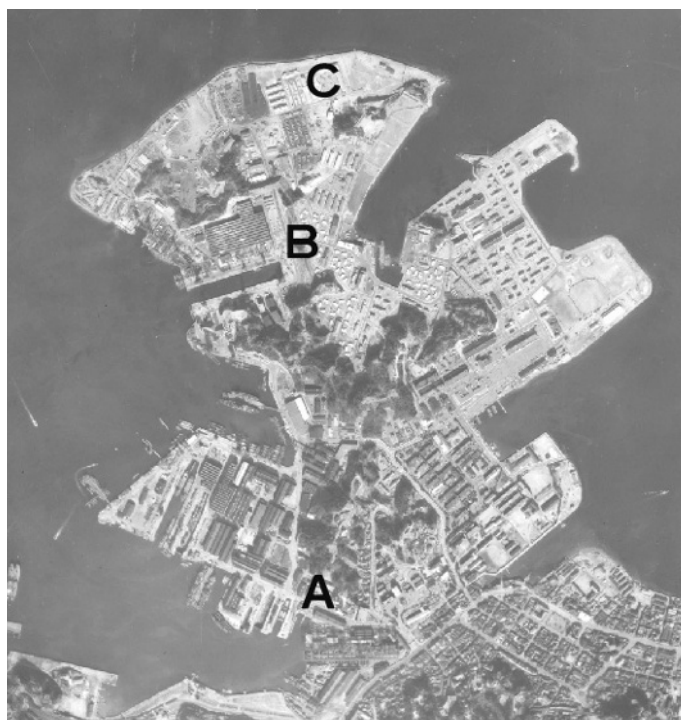


A部拡大



C部拡大

第2図 1947年の米海軍横須賀基地
同年2月米軍撮影，国土地理院所蔵。



A部拡大



C部拡大

第3図 1955年の米海軍横須賀基地
同年1月米軍撮影，国土地理院所蔵。



C部拡大

第4図 1963年の米海軍横須賀基地
同年6月米軍撮影，国土地理院所蔵。



第5図 現在の米海軍横須賀基地

右上2007年国土地理院撮影，国土地理院所蔵。左上，右下は2015年資料館撮影。

第2図はGPSOの活動が開始される前に撮影された航空写真である。A部をはじめとして多くの旧日本海軍施設が残っている。また、B部のトンネルも確認することができる。一方C部はまだ施設が整っていない。

第3図が撮影されたのは、サンフランシスコにGPSOの一部が移転し、横須賀とサンフランシスコを関係者が行き来していた時期である。第2図と比較すると、C部が整備されており、「(GPSOは)旧海軍施設を当初使用していたが(A部)、のちに松が浜に新たに施設を建設し、移転した」というP氏の証言を裏付けている。1955年までには、A部からC部へ移転したのであろう。

第4図は、GPSOがサンフランシスコに完全移転した後に撮影されたものである。完全移転した後もC部の施設はそのまま残っている。なお、A部については撮影範囲外のため資料はない。

第5図は、現在の米海軍横須賀基地である。A・B・C部が現存していることがわかる。第5図左上，右下に紹介している2点の写真は、A部に現存し、初期のGPSOが活動していたと推測される建物である⁽¹⁹⁾。ここは、戦前は日本海軍工廠造船部設計係製図工場・刷版所だっ

た⁽²⁰⁾。1階は元第三科員らがいた製紙関連、2階は伴繁雄チームがいたという証言が残っている⁽²¹⁾。

以上、伴手記、細川証言、P氏証言を航空写真と現存する建物より裏付け、具体的な勤務場所を特定した。

2. 登戸研究所関係者の公職追放

登戸研究所で庶務を担当していた大月陸雄（終戦時陸軍技術大尉）は、1951（昭和26）年の第二回統一地方選挙で地元である兵庫県・高橋村村会議員に立候補した。立候補した時期は公職追放期と重なるため、元軍人であった大月は、調査表など各種書類を選挙管理委員会に提出しなければいけなかった。その関係資料が2011（平成23）年当館に寄贈されたため、ここではこの資料を基に、登戸研究所関係者の公職追放について見ていくこととする。

(1) 公職追放

1946年1月4日、GHQは日本政府に対して、戦争犯罪人・陸海職業軍人・極端な国家主義者・国策会社の重要ポストだった人物など7つの項目を挙げ、該当する人物の公職からの罷免、官職からの排除を指令した⁽²²⁾。篠田鐮登戸研究所長、草場季喜同第一科長、山本憲蔵同第三科長は公職には就いていなかったが、公職追放潜在的該当者として1947年11月に仮指定されている⁽²³⁾。また、大月は終戦時大尉であったため、公職を希望する際は調査表（履歴書・職歴書から成る）を提出し、審査を受ける必要があった。以下、大月の調査表関連資料を紹介する。

第6図 海外旅行及滞留 補助紙（上）

大月昌彦氏寄贈。作成時期不明。大月陸雄が1938（昭和13）年から44年の間に兵器輸送のため、中国2回、満洲2回行ったことがわかる。公職追放該当者に提出を求められた調査表関連資料と推定。

第7図 職業及軍務の履歴 補助紙（右）

大月昌彦氏寄贈。作成時期不明。大月陸雄が1945（昭和20）年10月26日まで登戸研究所の残務処理に関わっていたことがわかる。公職追放該当者に提出を求められた調査表関連資料と推定。

昭和二年 十二月一日	二等 警查長	陸軍 技術大尉	大月 陸 旗
昭和二年 五月八日	二等 警查長	陸軍 技術大尉	大月 陸 旗
昭和四年 六月一日	二等 技術大尉	陸軍 技術大尉	大月 陸 旗
昭和五年 二月一日	二等 技術大尉	陸軍 技術大尉	大月 陸 旗
昭和七年 二月一日	陸軍 科學研究所	陸軍 科學研究所	陸軍 科學研究所
昭和八年 六月一日	陸軍 科學研究所	陸軍 科學研究所	陸軍 科學研究所
昭和十一年 八月一日	二等 警查長	陸軍 科學研究所	陸軍 科學研究所

出 石 郡 町 村 公 用 紙

昭和三年二月三日	工務技師註冊（勅令第三二八号）
昭和五年八月三十一日	一等技術加得
昭和五年十月九日	
十月二日	
十月二十日	
昭和五年五月十日	長崎港防着
五月三十日	中華民國（出張命令）
六月八日	山口港出役
	長崎港歸着
昭和五年七月一日	陸軍部研究所（出張命令） 陸軍部研究所（出張命令）
昭和五年五月五日	
昭和四年九月二十二日	滿洲國（出張命令）
六月七日	山口港出役
六月十二日	下関港歸着

出石郡野村公用水紙

昭和五年 三月九日	工兵少尉 待命被仰付
〃 三月十日	平海段被仰付 臨時召集、陸軍科學研究 所附被仰付
昭和五年四月十日	第三支隊特別為任將校
〃 六月一日	少尉 (勅令第五〇四號ノ依リ)
〃 七月二日	兵隊中尉
昭和六年六月五日	陸軍技術本部附(補成改め)
〃 八月一日	兵隊中尉
昭和七年十月十六日	才九陸軍技術研究部附(補成改め)
〃 十八年十月十一日	中文那(有限生命社)
〃 二月五日	福岡歸着
昭和十九年五月十六日	滿洲心(有限生命社)
〃 五月十七日	下関曉書堂

出石郡町村公用紙

昭和二十年四月

昭和九年六月六日
八月十日
九月五日
九月三日
昭和十年十月三日

授爵中尉
授爵大尉
二等叙下賜
免本職

下関憲兵署

出石郡町村公用紙

出石市史資料館蔵

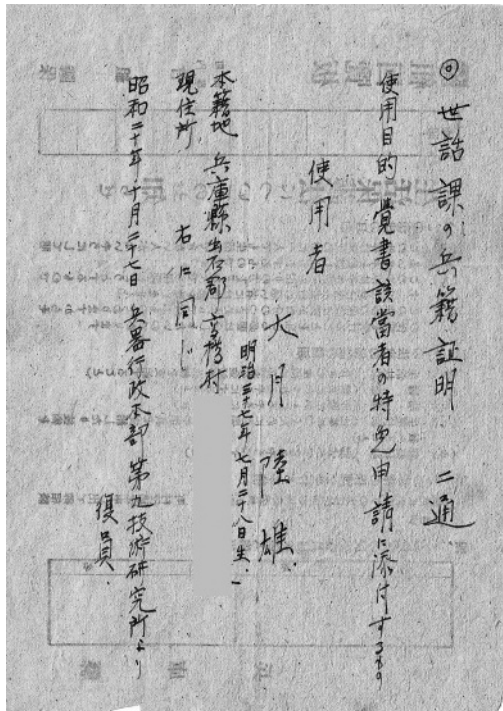
第8図 大月陸雄（陸軍技術大尉） 履歷書

大月昌彦氏寄贈。作成時期不明。1926（大正15）年11月30日～1945（昭和20）年10月27日までの大月陸雄の履歴。公職追放該当者に提出を求められた調査表関連資料と推定される

(2) 特免申請

米ソ間の対立が激しくなる中、日本は米国にとってアジア防衛に欠かせない重要な立場となるため、GHQは日本に対する占領政策を変更し、1949年2月8日に公職追放に対する特免措置を講じ、「第二次公職資格訴願審査委員会」を設置する。これを受け、各市町村では該当者に対し特免申請の手続きをするよう通知を出した⁽²⁴⁾。

大月陸雄も特免申請手続きを希望したことが第9図からわかる。

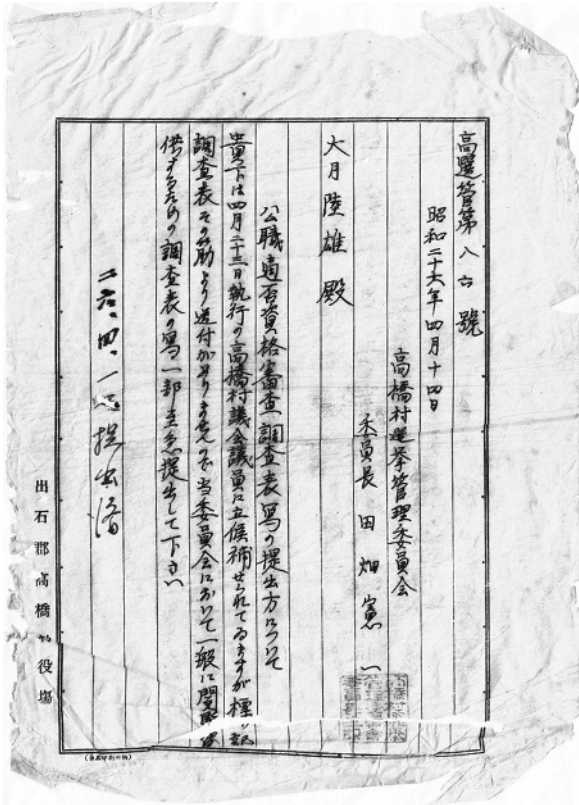


第9図 覚書該当者の特免申請に関するメモ
大月昌彦氏寄贈。作成時期不明。

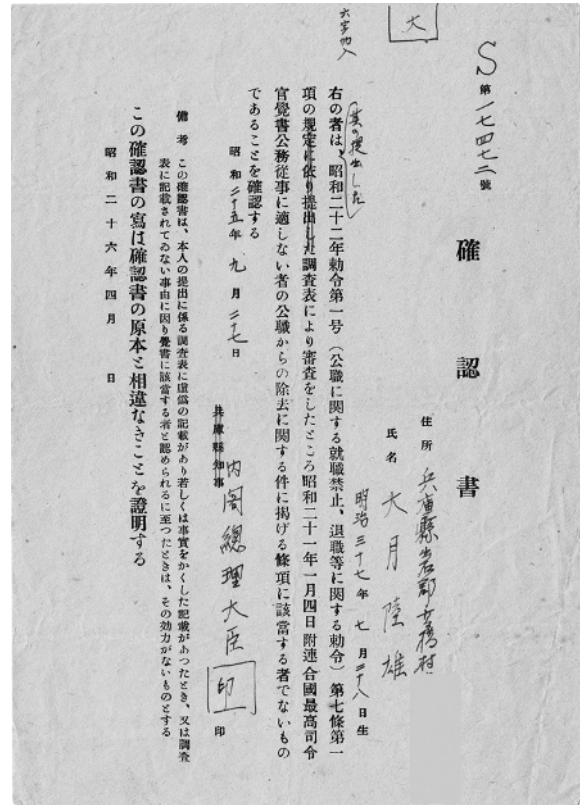
(3) 公職追放解除

朝鮮戦争勃発後の1951年6月20日に日本政府は第一次追放解除を発表し、一部の人々に対する公職追放が解除される（1952年のサンフランシスコ講和条約発効とともに全面解除）。

第一次追放解除前の1951年4月、第二回統一地方選挙において、大月は高橋村（兵庫県）村議会議員に立候補した。その際に、選挙管理委員会に公職追放に該当しないか調査表写しの提出を求められている（第10図）。また、立候補に前後して、大月が公職追放に該当しないことを示す確認書が用意されたことが第11図からわかる。



第10図 公職適否審査調査表寫の提出方について
大月昌彦氏寄贈。1951（昭和26）年4月14日発行。



第11図 確認書
大月昌彦氏寄贈。1950（昭和25）年9月27日付。

なお、第二回統一地方選挙日程は以下の通りである。

1951（昭和26）年4月3日	告 示
4月13日	立候補届出締切
4月20日	補充立候補届出締切
4月23日	投 票 日
4月24日	開 票 日

この選挙で大月の立候補が認められたかどうかは資料が残っていないため不明だが、公職追放全面解除後の1955年に行われた第三回統一地方選挙では当選し、町会議員を務めたことがわかっている⁽²⁵⁾。

3. 元勤務員らの戦後の交流

(1) 登研会発足と「登戸研究所跡碑」建立

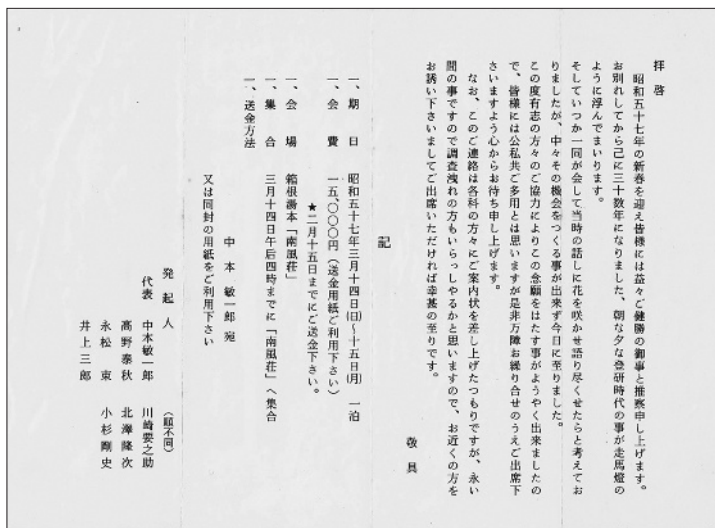
1970年代末、生田近辺に住む元勤務員らから、「登戸研究所跡碑」を明治大学生田キャンパス内に建立しようという声上がる。その建立資金を集めるため、元同僚・上司らに呼びかけ「登研会」を発足することとなった。

第12図に示す第一回登研会案内状には「いつか一同が会して当時の話しに花を咲かせ語り尽くせたらと考えておりましたが、中々その機会をつくることが出来ず今日に至りました。この度有志の方々のご協力によりこの念願をはたす事がようやく出来ました（後略）」とある。

それまでも各科毎に名簿を作成し、OB会を設けるなど交流はあったが、科を超えて集まることはあまりなかったため⁽²⁶⁾、登研会が発足することで関係者に新たな交流が生まれた⁽²⁷⁾。登研会発足は、のちに渡辺賢二氏⁽²⁸⁾や川崎市民、高校生たちの手によって登戸研究所が解明されていくきっかけへと繋がっていく。

また、元第三科関係者らは独自に「三科会」を立ち上げる。これは、第三科の業務が他と比べても格段に秘匿性が高かったので、他科の人を交えることを避けていたためだった。三科会の中でも数名は登研会にも所属していたが、その数はごく僅かだった。

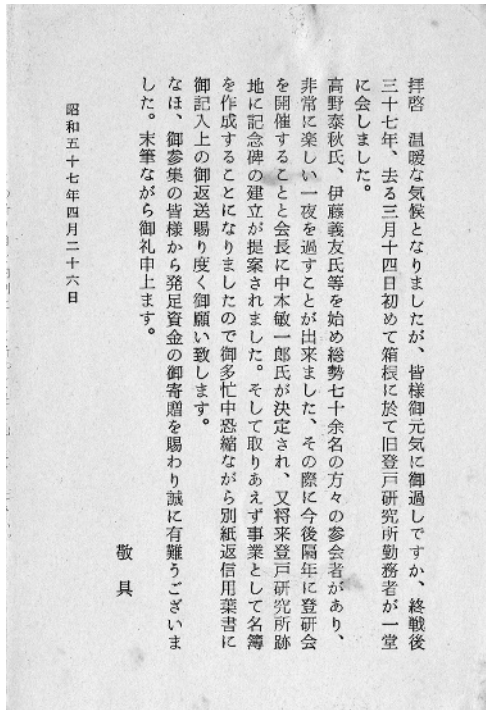
その後、1988（昭和63）～1989年頃に明治大学生田キャンパス内の生田神社境内に登戸研究所跡碑が建立される⁽²⁹⁾。裏面には「すぎし日は この丘に立ち めぐり逢う」という句が刻まれている。この句は、登研会メンバーの投票により三案の内から選ばれた。2000年頃から登研会に出席するようになっていた渡辺賢二氏は、登研会は科長・将校から雇員・工員に至るまであらゆる身分・科の人が参加していたが、上層部の意見が採用されたのではなく、身分や科を超えて、すべての元登戸研究所勤務員の思いが句にこめられていることに意味があると語っている⁽³⁰⁾。



第12図

第一回登研会案内状

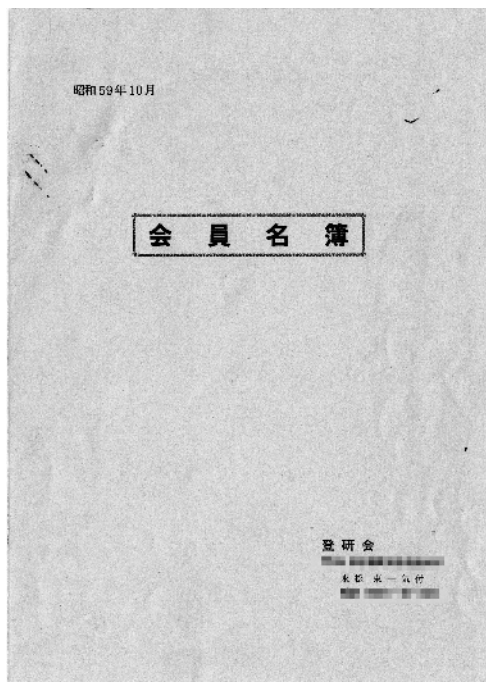
栗山武雄氏寄贈。1982年に登研会が初めて開催された。初代会長は庶務班長だった中本が務めた。



第13図
登研会名簿への参加を呼びかけるハガキ
栗山武雄氏寄贈。1982年(昭和57)年4月26日付。
「[[第一回登研会で] 登戸研究所跡地に記念碑の
建立が提案されました。』とある。



第15図
登戸研究所跡碑
2012年資料館撮影。



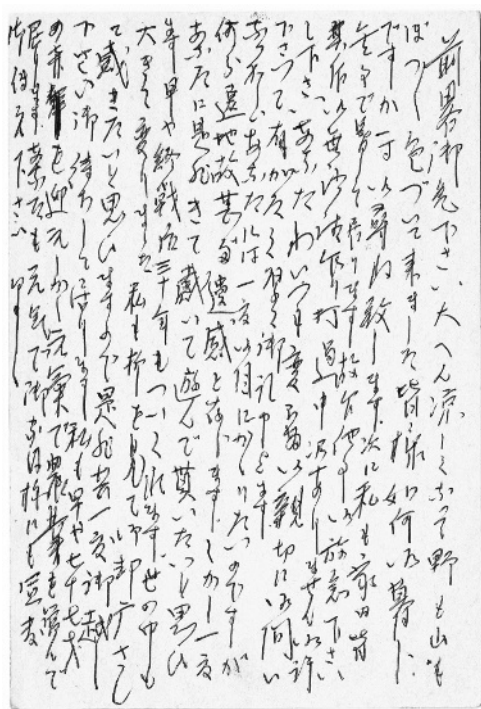
第14図
昭和59年版登研会会員名簿
洗谷光子氏寄贈。



第16図
登戸研究所跡碑除幕式の写真
洗谷光子氏寄贈。1989年春撮影。写っているのは伴繁雄。

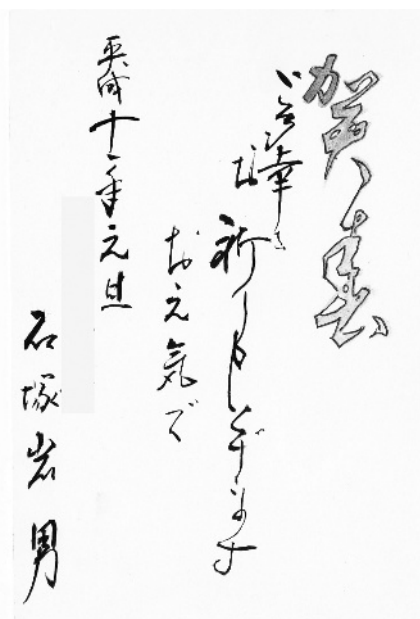
(2) 元勤務員と疎開先との戦後の交流

第四科で働いていた栗山武雄氏は、1945年4月の登戸研究所分散疎開時に兵庫県小川村へ疎開する。その際に、下宿した石塚家と長年に渡る交流があったことを示すのが第17図と第18図の資料である。昭和50年代に栗山氏が小川村を訪れた際には、当時の関係者が集められ歓待されたとのこと⁽³¹⁾。



第17図
ハガキ

栗山武雄氏寄贈。1974（昭和49）年10月11日付。
差出人：石塚奎治氏，受取人：栗山武雄氏。



第18図
年賀状

栗山武雄氏寄贈。1999（平成11）年1月1日付。
差出人：石塚岩男氏，受取人：栗山武雄氏。岩男氏は奎治氏の息子。2世代に渡って交流が続いていたことがわかる。

(3) 元勤務員らによる記録の出版

GHQの取り調べ終了後、主として風船爆弾関係者らが作戦の概要や研究開発過程を公に発表するようになった。しかし、他の登戸研究所の活動については、詳細に公表されることはなかったが、1984年に第三科長であった山本憲蔵、2001年に第二科第一班長であった伴繁雄が自身の活動の全容をまとめた記録を出版したことは、他の元登戸研究所関係者に大きな影響を与えた。

① 山本憲蔵

山本憲蔵は、1981年にNHK総合テレビで放映された『歴史への招待～中国法幣贋造作戦』に出演をし、第三科の活動を語っている。これは、今まで公にされてこなかった登戸研究所第三科の活動を、関係者、しかも責任者本人がテレビで証言をするという初めての出来事だった。

それに続き、1984年には、自身の経験を基に第三科の活動についてまとめた『陸軍贋幣作戦』を現代史出版会より出版した。

この2つの出来事は、今まで「秘密にしなければいけない」と関係者が口を閉ざしてきたことが、「もう公になっているから話してもいい」と気持ちに変化するきっかけとなる。

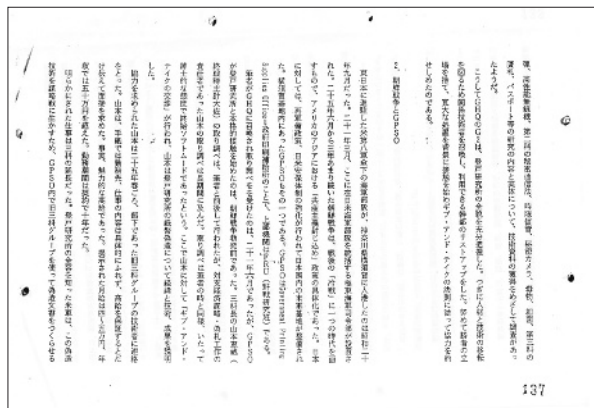
② 伴繁雄

第二科第一班長であった伴繁雄は、元同僚にも原稿協力を呼びかけ、1988年から5年ほどかけて、登戸研究所の全容を明かす『陸軍登戸研究所の真実』を書きあげる。第19図に示す妻および知人が代筆した草稿には何度も手が入れた跡が見られ、自身の経験を後世に残そうとする伴の強い思いが伝わってくる。また、第20図に示す「伴繁雄手記」には、書籍には掲載されていない帝銀事件やGPSOの活動など、戦後の自身の歩みについても詳しく書かれている。

しかし、伴は『陸軍登戸研究所の真実』が出版されるのを見届けることなく、1993年11月に亡くなる。その後、2001年に芙蓉書房出版社より同書が出版される。



第19図
『陸軍登戸研究所の真実』草稿
伴和子氏寄贈。



第20図
「伴繁雄手記」(複写)
渡辺賢二氏寄贈。『陸軍登戸研究所の真実』初期の原稿である。

おわりに

以上、新しい資料・証言を基に、本稿では元登戸研究所関係者の戦後の活動の一端について紹介した。GPSOについては、新たな証言が出てきたこともあり、複数名の証言を検証できたことで、活動の一端を解明することができた。しかし、公職追放も含め、本稿で紹介した登戸研究所関係者らの戦後についてはこの度の第6回企画展で紹介するのが初めての試みであり、資料収集・調査をこれからも継続し、より一層の解明を進めていかなければならない。

謝辞

本稿の基となる第6回企画展第二期「1945年8月15日以降の登戸研究所 一元所員らの戦後一」を執筆するにあたり、下記の方々・機関にご協力いただきました。ここに記して感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)

大月昌彦, 岸井三治, 栗山武雄, 今野淳子, 米海軍横須賀基地, 細川陽一郎, 町井敏子, 森田忠正, 弓削昭道

《参考文献》(編著者五十音順)

- 神奈川県教育委員会『神奈川県の近代化遺産 - 神奈川県近代遺産(建造物等)総合調査報告書-』(神奈川県教育委員会, 2012年)
- 草場季喜「風船爆弾による米本土攻撃」(日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』, 図書出版社, 1977年)
- 自治大学校『公職追放』(自治大学校, 1964年)
- 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 2001年)
- 増田弘『公職追放論』(岩波書店, 1998年)
- 増田弘『公職追放 三大政治パージの研究』(東京大学出版会, 1996年)
- 横須賀市『新横須賀市史』別編 文化遺産(横須賀市, 2009年)
- 渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」(歴史科学協議会編『歴史評論』8月号通巻772号, 校倉書房, 2014年)

第6回企画展「NOBORITO1945 ー登戸研究所 70年前の真実ー」

第二期 1945年8月15日以降の登戸研究所

元所員らの戦後 展示資料一覧

本稿図表番号	資料名	所蔵先	資料番号	展示番号
第19図	『陸軍登戸研究所の真実』草稿	当館蔵(伴和子氏寄贈)	152	1
掲載なし	山本憲蔵『通貨謀略』の原稿(複写)	当館蔵(渡辺賢二氏寄贈)	164	2
第11図	確認書	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1021	3
第10図	公職適否資格審査調査表寫の提出方について	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1022	4
第9図	覚書該当者の特免申請に関するメモ	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1023	5
第6図	海外旅行及滞留 補助紙	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1024	6
第7図	職業及軍務の履歴 補助紙	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1025	7
第8図	大月陸雄(陸軍大尉) 履歴書	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1020	8
第13図	登研会名簿への参加を呼び掛けるハガキ	当館蔵(栗山武雄氏寄贈)	970	9
第12図	第一回登研会案内状	当館蔵(栗山武雄氏寄贈)	971	10
第17図	栗山武雄氏宛 ハガキ(石塚奎治氏より)	当館蔵(栗山武雄氏寄贈)	1363	11
第18図	栗山武雄氏宛 年賀状(石塚岩男氏より)	当館蔵(栗山武雄氏寄贈)	1364	12

- (1) 伴繁雄「伴繁雄手記」(1988～1993年頃, 当館所蔵資料No.1128) のこと。本稿第20図に紹介。
- (2) 伴, 同前137
- (3) 伴, 同前137, 138
- (4) 山本は1921(大正10)年, 陸軍経理学校卒業後, 歩兵第35連隊付, 歩兵第3連隊付, 第1師団, 第11師団経理部員などを経験した後, 1938年参謀本部第二部第七課兵要地誌班に配属されている。またこの間, 1929年にはロシア語研修のため東京外国語学校へ委託生として派遣されている(以上, 秦郁彦編「日本陸海軍総合辞典」東京大学出版会, 1991年より)。以上の経歴から, 山本は登戸研究所第三科長に任命される以前は, ソ連-満州国境域周辺で対ソ連情報戦を行っていたことがわかる。
- (5) 伴, 前掲資料138
- (6) 伴, 前掲資料138～140
- (7) 伴, 前掲資料138～139
- (8) 伴, 前掲資料140～141には第二科第5班(カメラ関係の秘密戦器材を研究開発)班長だった丸山政雄や細川陽一郎らをGPSOメンバーに加え, 偽造防止用の無色印刷インキの研究試作実験を重ねたとある。
- (9) 伴, 前掲資料138-139
- (10) 伴, 前掲資料140
- (11) P氏(仮名)より筆者聞き取り, 2015年10月9日。伴, 前掲資料141～142には, 1960(昭和35)年にGPSOは閉鎖され, 伴はその後残務処理を行い, 1961年まで日系ボスの下で岡田正敬とともに翻訳作業をしたとあるため, 伴とP氏の証言は合致する。なお, P氏は第三科北方班員として登戸研究所で勤務した後, 山本の呼びかけにより1953年よりGPSOで勤務した人物である。
- (12) 伴, 前掲資料139
- (13) 伴, 同前
- (14) 前掲P氏より資料館聞き取り, 2015年10月9, 24日。P氏によると静岡の「スギモトテッコウ」に製造を依頼したという。
- (15) 前掲P氏より資料館聞き取り, 2015年10月9日, 24日。
- (16) 細川陽一郎より資料館聞き取り, 2015年5月25日。細川は第二科で超縮写器材の研究開発をしていた。
- (17) 前掲P氏より資料館聞き取り, 2015年10月9日, 24日。
- (18) 横須賀市『新横須賀市史』別編 文化遺産(横須賀市, 2009年) p.31
- (19) 前掲P氏より筆者聞き取り, 2015年10月9日, 24日。またP氏に建物の写真を見せ, 確認をとっている。
- (20) 神奈川県教育委員会『神奈川県の近代遺産-神奈川県近代遺産(建造物等)総合調査報告書一』(神奈川県教育委員会, 2012年) p.134, 『新横須賀市史 別編 文化遺産』 p.28, p.70。
- (21) 前掲P氏より筆者聞き取り, 2015年10月24日。
- (22) SCAPIN-548, 550
- (23) 総理庁官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』(日比谷政経会, 1949年)
- (24) 例えば鳥取県長瀬町(現・東伯郡湯梨浜町)において昭和24年4月19日付で出された「覚書該当指定特免申請の手続きについて」には「(前略)特免申請手続きは昭和24年2月8日公布の総理庁令第九号に定められてあり, 特免申請手続きを希望される方は本月25日までに役場へおいで下さい(以下略)」とある。
- (25) 但東町議会編『但東町議会のあゆみ』(但東町議会, 2005年)に, 大月は第一期但東町議会議員(1956.9.30～1957.9.29)を務めていたことが記録されている。高橋村は1956年9月に合橋村・資母村と合併し但東町となるが, 合併以前の議員関連資料について豊岡市, 豊岡市立図書館および但東町分館に問い合わせたところ所蔵が無いとのことで, 1951年の選挙において大月の立候補が認められたかどうかは現時点ではわからない。
- (26) 表紙に「38.5.25 登研第二, 第四科会記念」と書き込みがされている『登研第四科会住所録(1963年4月1日版)』(当館所蔵資料No.588)および「登研第二・四科会集合写真」(1963年5月25日撮影, 当館所蔵資料No.1053)より第二科と第四科の交流は登研会発足以前にもあったことが推測される。
- (27) 奥原タミ氏, 河本和子氏, 横山サト子氏より資料館聞き取り, 2011年3月4日。奥山氏は総務科, 河本

氏は庶務科兵器班，横山氏は4科所属だった。3人とも近所に住んでいたが，会っても話をするということもなく，仲良くなったのは登研会発足後だという。ただし，登研会発足後も，登戸研究所のことは誰にも話してはならないとの思いから，出席することはなかった人もいた。

(28) 渡辺賢二氏については本誌 pp.1-2を参照されたい。

(29) 跡碑には「昭和六十三年十月 建之」とあるが，跡碑除幕式は1989年春に行われた。元登戸研究所技師・北澤隆次の知人宛ての1988年12月29日付書簡（当館所蔵資料No.270）によると，昭和天皇の病状が悪化していることに伴い，明治大学生田キャンパス内で天皇制反対の学生運動が活発なため，落ち着くまで境内に跡碑建立を見送るとあり，生田神社境内にいつ建立されたか明確な時期は不明である。

(30) 渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」 pp.44～45（歴史科学協議会編『歴史評論』8月号通巻772号，校倉書房，2014年）

(31) 栗山武雄氏より筆者聞き取り，2015年7月16日。